平成６年度第３回12月14日

演題：卓球に関する各国の研究について

演者：蛭田　秀一（体育科学部）

近年、スポーツ科学の進展に伴い、スポーツ種目別の学会・研究会が国内や世界の各地で開催されるようになった。卓球もその１つで、1989年から隔年で、世界選手権の開幕直前に卓球に関する科学研究の国際会議が開催されている。私は、日本卓球連盟スポーツ科学委員会委員として第１回からこの会議の運営に参画したことから、この会議について以下に紹介しながら、卓球の科学研究の国際交流の現状と将来について考えてみたい。

会議の正式名称は「International Table Tennis Federation Sports Science Congress（国際卓球連盟スポーツ科学会議）」である。この会議は、国際卓球連盟(ITTF)が音頭をとり、第１回会議の際に結成されたThe ITTF-International Academy of Table Tennis Sciences（ITTF国際卓球科学アカデミー）によって主催・運営されている。現在までに３回の会議が開催されており、開催地と演題数は以下のとおりである。

1989年　第１回　ローマ（イタリア）12か国13演題

1991年　第２回　深谷（埼玉県；日本）14か国39演題

1993年　第３回　ファルケンベリ（スウェーデン）　15か国41演題

（1995年　第４回　北京（中国）参加国数・演題数未定）

第１回（ローマ）では、キーノート３演題（イタリア、フランス、東ドイツ）と国別の10演題（カナダ、中国、ギリシャ、西ドイツ、日本、ヨルダン、メキシコ、ユーゴスラビア、イタリア、オーストリア）が報告され、その後参加者は５つの分科会（生理学、バイオメカニクス、心理学、栄養学・ドーピング、戦術）に分かれて討論を行った。最後にITTF国際卓球科学アカデミーを創設し、会議の隔年開催を決めた。

第２回（深谷）では、研究発表会の体裁を整え、以下の分野別（プログラムの分類による）に発表が行われた。

キーノート　３演題（スイス、ルクセンブルグ、日本）

医学　６演題（日本３、ユーゴスラビア、ソビエト、エジプト）

社会学　３演題（日本、イラン、メキシコ）

バイオメカニクス　９演題（日本６、中国２、ウルグアイ）

トレーニング　８演題（中国３、イギリス２、日本、ソビエト、オーストラリア）

心理学６演題（日本２、オーストラリア、イギリス、ブルガリア）

第３回（ファルケンベリ）での分野別演題数は以下のとおりである（プログラムの分類による）。

キーノート　４演題（スイス、ルクセンブルグ、ノルウェイ、スウェーデン）

バイオメカニクス　９演題（フランス３、ロシア３、日本、ドイツ、ヨルダン）

生理学・スポーツ医学　６演題（日本４、中国２）

トレーニング　５演題（中国２、ブラジル、ロシア、ウクライナ）

その他　12演題（中国４、ルクセンブルグ３、ノルウェイ２、デンマーク、サウジアラビア、南アフリカ）

以上のように、回を重ねるにしたがって参加国数、演題数ともに増加してきてはいるが、卓球が世界156の国・地域（1993年６月現在）が加盟している競技であることを考えると、まだまだ少ないことは否めない。今後はもっと多くの国の研究者が参加しやすくなるための方策（発展途上国への参加費の援助など）が必要であろう。

詳しい個々の研究内容に関しては、研究雑誌

「International Journal of Table Tennis Science No.1 (1992)」「同 No.2 (1994)」を参照していただきたいが、私なりの分類では研究の方向は次の3つに分けられると思う。(1)卓球競技の発展に関するもの（プラス要因・マイナス要因）(2)競技力向上に関するもの (3)その他。(1)には、用具（ラケット、ラバーシート、接着剤、ネットなど）の規格やルールの変更が卓球の面白さにどう影響するかやドーピングの問題などが含まれている。(2)には、生理学、バイオメカニクス、心理学などの手法を用いての選手の分析や様々な練習法やトレーニング法の効果についての研究などが含まれる。いずれにしろ、卓球に関する科学研究の国際交流は始まったばかりであり、今後ますます盛んになって卓球はもちろん他のスポーツ関係者や一般の人々にもインパクトを与えられるようになることを期待している。